

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：14403

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884027

研究課題名(和文) 中世語資料としての抄物の再評価 両足院蔵「杜詩抄」の言語と資料の研究

研究課題名(英文) Re-evaluation of "Shomono" as Records of History of Japanese language

## 研究代表者

山本 佐和子 (YAMAMOTO, Sawako)

大阪教育大学・教育学部・講師

研究者番号：00738403

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世室町期の注釈書の一種「抄物(しょうもの)」が、日本語史の資料としてどのような可能性を持っているかを、未調査の抄物における新規の言語事象を検証することで示した。建仁寺両足院蔵「杜詩抄」(天正9(1581)年書写)では、繫辞「チャ」を用いた引用表現や、丁寧語「候」の濁音形「ソウ」(に+候、繫辞)が多用されている。「チャ」と「ソウ」は共に、「杜詩抄」が引く先行の抄物の一つで見られ、注釈内容で使い分けられている。抄物の元となる講義で、話題に応じた口調の切り換え(スタイルシフト)が行われていたことを反映したものと考えられ、抄物の新たな資料的価値を示す事象である。

研究成果の概要(英文)：This research investigated the scholarly possibilities of "shomono" (this genre refers to the annotation of Chinese classics written in the colloquial style), within the context of the history of the Japanese language. The research surveyed the "Tosisyo;," which is an annotation of the Chinese poetry of Du Fu.

In "Tosisyo;," the following constructs are used, 1. the copula "dya" for quotations, and, 2. the copula "zou" derived from "sourou". Both of these constructions are used in speech. We can thereby presume that the purpose for production of the "Tosisyo" was to record and reproduce the tone of a certain lecturer.

研究分野：日本語史

キーワード：中世語 抄物 文法史

## 1. 研究開始当初の背景

### (1)抄物の言語史資料としての価値

「抄物(しょうもの)」は、禅僧や博士家の学者による、漢籍・仏書等の講義の筆記に基づく注釈書で、キリシタン資料、狂言台本と共に室町期の三大口語資料とされてきた。左記三者の中でも、とりわけ言語に対する規範が緩く、通俗的な語・慣用句が多く見られたり、言語変化をいち早く反映したりすることで知られている。

抄物が中世日本語史の研究資料として注目されたのは、明治末期である。その成果は、稿者(研究代表者:山本佐和子)の関わる語彙史・文法史に限っても数多く存する。

### (2)近年の抄物研究の停滞

抄物は、その高い資料的価値にも関わらず、現在、抄物を主な資料とした日本語史の研究や、抄物の資料的研究は停滞気味である。

抄物を資料とする言語史研究が減少したのは、言語調査に多くの労力と時間がかかることが主因である。大部なものが多く、内容は原典の注釈に留まらず、網羅的・拡散的な知識を含む。全て片仮名・漢字交じり表記であることも、戦後の初等教育を受けた者には負担が大きい。特に、他の文献資料に索引やコーパスが整備された1990年代以降、抄物の研究に新たに着手する研究者数自体がごく僅かになっている。

抄物の資料研究も、同じ1990年代からあまり進展がない。1970年代から抄物研究を牽引してきた柳田征司氏は近著で、日本語史資料としての抄物の価値を具体的な言語事象の考察を例に示すと同時に、新たな抄物の発掘・整備が急務であることを指摘している(柳田2012, 2013)。

## 2. 研究の目的

抄物における以上の研究状況をうけ、本研究では、当面の課題として、建仁寺両足院蔵「杜詩抄」という一抄物を取りあげ、この抄物の言語実態の記述的研究を行うことによって、言語研究資料としての抄物の可能性を示す。言語史研究と文献調査を並行して行うのは、抄物を資料とする日本語史研究と、抄物自体の資料的研究の両方を継続していく必要があるためである。

### (1)「杜詩抄」の書誌的概要

「杜詩抄」の書誌的概要を記しておく。高見1977aの報告に、山本2013aで2011年調査時の状態を補足したものを再掲する。

両足院蔵本は、元亀元~天正9〔1570~1581〕年書写、20巻25冊。林宗二ほか三名の書写。宗二以外の書写者は不明で、宗二と共同で筆写したとみられる某Aと、巻四・一〇を書写した某B。25冊のうち、宗二筆は17冊(巻一・二乾坤・三坤・九・十一・一四

~二〇坤)を占め、残り8冊のうち3冊(巻五・六・七)も、某Aと宗二が途中で交代しつつ書写したものである。

各冊の大きさは大小不定で、おおよそ三種類。縦長小型の24.0~25.0×16~17cm、やや大型の26.0~27.0×20.0cm、正方形に近い23.0×18.5cm。一部の冊で、途中大きさの異なる紙が使用されている。全体に、本文と同紙・同筆の付箋が多く見られる。

題箋・外題はない。現在の黄・赤茶の表紙は後補で、破損箇所から、元は本文と同紙の紙表紙だったことが分かる。

内題は、巻一のみ「集千家註批点杜工部詩集 巻之一 私」のように、原典の書名を含む。他は「杜詩抄第」の後に、小字で私私抄 私記之 のいずれかを付すものが一冊、雪が四冊。各巻下巻「坤」五冊には、「巻・坤」が本文の外側右傍に小字で補入、うち二冊には私 が書かれている。

奥書、および書写時についての記録は、巻一・二坤・三坤・十一・一七・二〇坤、の計6カ所に存する。

- (1)a.《巻一・2ウ行間書入れ》今年元亀元年庚午二至テ七百九十七年也、今年此抄ヲ始テ思立五月廿一日予七十三歳宗二
- b.《巻二坤・巻末》元亀二年辛未正月十五日抄之了以雪嶺和尚御聞書令清書
- c.《巻三坤・巻末》以雪嶺多少聞書並続翠抄抄之畢 宗二
- d.《巻十一・巻末》元亀三年壬申五月十七日抄之畢 宗二七十五歳
- e.《巻一七・巻末》天正九年 辛巳 六月七日抄之了 宗二八十四歳 於一条院御門迹孝経誦申了
- f.《巻二〇・巻末》天正七年 己卯 十月四日巳刻抄出了 宗二

奥書から、本抄の作成に「雪嶺永瑾の聞書」「続翠抄」が参照されていることが分かる。

諸本には、足利学校遺跡図書館所蔵の欠本(存巻、一(前半欠)・二坤・三坤・五~一〇、一二)が存するが、足利学校蔵本は、両足院蔵本を直接の親本とした転写本である(高見1977a)。

### (2)「杜詩抄」に関する先行研究

「杜詩抄」は、約70年前に、五山文学・文化史の史料として見出された。芳賀1945・1956では、本抄の奥書の一部と「実隆公記」の記事に基づいて、本抄の作成には詩僧として著名な雪嶺永瑾〔?文安4(1447)~天文6(1537)〕が関わっているとされた。この指摘以来、本抄は一般的に「(雪嶺)永瑾の杜詩二十巻の全詩にわたるきわめて詳細な口釈を林宗二らが筆録したもの」(黒川1977)という見方がなされてきた。

また、言語面については、高見三郎氏による「杜詩続翠抄」との比較を中心とした研究

がある(高見 1977a・b等)。

しかし、高見氏の研究以後、「杜詩抄」は、両足院蔵本の乱筆や破損の度合いの大きさから、当時の写真では読解が困難な箇所が多かったこともあって、詳しい調査は殆どなされてこなかった。現在では、デジタル画像により、薄墨を用いた箇所や細字の箇所も含めて、全巻、ほぼ解読が可能になっている。

### (3)本研究以前の研究成果

稿者は、2005年から参加している建仁寺両足院蔵書調査(木田章義氏:現京都大学名誉教授主宰)において、2009年夏の調査時に、「杜詩抄」に、抄物では殆ど例がない文末表現「～チャ」が多用されることを見出し、画像データの加工・複製本等の準備を経て、2012年に調査を開始した。

本研究以前には、山本 2013a において、「杜詩抄」が、雪嶺永瑾の講義の筆録そのものではなく、林宗二による複数の先行抄の私的な編纂物であることを指摘した。また、山本 2013b では、「杜詩抄」における文末表現「～チャ」の使用を報告した。

## 3. 研究の方法

本研究では、上記 2-(3)を進展させ、言語面・資料面の両方から更に考察を進めて、「杜詩抄」を資料としてどのような言語研究が可能かを示した。

### (1)言語実態

「杜詩抄」に見られる言語事象のうち、文末表現を中心に用法や統語的特徴を記述し、前後の時代から関連のある現象を見出し、史の変遷を考察した。

「杜詩抄」は言語資料として、ある現象を観察するのに十分な言語量を有する(全丁数(墨付)1908丁)。文体が異なる先行抄を編纂した抄物のため、多様な言語を観察できる、編纂時期が抄物の中では際立って遅い、という特長を有する。

### (2)資料的性格

「杜詩抄」では、引用される先行抄の出典は殆ど示されておらず、古記録類においても成立経緯を知る情報はごく僅かである。

そのため、成立経緯(作成者、作成時期、作成された目的、想定された読者など)は、言語事象や構成等の内部徴証から推定する必要がある。本研究では、(1)の各事象の史の変遷と「杜詩抄」内部での分布が、成立経緯を知る手がかりとなることを示した。

## 4. 研究成果

以下、本研究で得られた言語事象についての研究成果を(1)～(3)に、それらから推測できる資料的性格を踏まえた今後の展望を、(4)に示す。

### (1)文末表現「～チャ」の統語的特徴

「杜詩抄」には、抄物の文末としては稀な「～チャ」が多用されている。

(2)a.〔聖寿一【宜過一萬春】カマイテ目出トウ万年ヲイキアレチャ

(一六坤 35 才)

b.〔莫一【令鞭血地 再湿漢臣衣】果テ亦京ノ辺へ胡ヲ八打入テ、忠臣衣ヲハシ涙ニ湿スナチャ (一二 74 才)

山本 2013b では、「杜詩抄」に(2)のような文末表現「～チャ」が見られることを報告したほか、「～チャ」について、次の3点を指摘した。

本抄の後半(巻 11～20)の一部の詩の注釈にのみ用いられていることから、「杜詩抄」を編纂する際に参照された先行の抄物(以下、「先行抄」と称する)のひとつに由来すると考えられる。

「～チャ」は、一般的な抄物の「ソ」のように単独で文体を成すことはなく、「ナリ」「ソウ(候)」「無助詞(「～トツクトヲ申した」等)などの複数の文末表現と一連の抄文を構成している。

の文末表現は、凡そ注釈内容ごとに使い分けられている。「～チャ」は、原典の口語による直訳を引用表現的に示す場合に用いられる。

さらに、「～チャ」を含む複数の文末形式を併用する抄文でのみ、才段長音開合音を合音で表記する傾向が顕著であることから、この先行抄では、講者の特徴的な口調を反映しようとする意図のもと、「ソ」ではなく、文末表現「～チャ」が用いられたと考察した。

以上を承けて、本研究では、文末表現「～チャ」について、「杜詩抄」のほかにも文末表現「～チャ」が用いられる二つの抄物、國學院大學図書館蔵「木杯余瀝」、後水尾天皇講「百人一首聞書」、および、近世の話し言葉を反映する文献を調査して、統語的特徴と史の変遷を考察した。

まず、文末表現「～チャ」は、繫辞を用いた引用表現(構文)の一種と捉えることができる。「～チャ」に直接前接する形式は、活用語の終止連体形や命令形、終助詞など多様だが、全て原典の詩句の内容に対応した依頼命令、感嘆、疑問、推量・推定等を表す「文」を引用したものと一般化できる。

文末表現「～チャ」は、注釈で多用される、(3)のような原典の語彙に相当する口語の語彙を例示する注釈文から生じたと考えられる。構文的には名詞述語文に等しい。

(3) [原典の語 A]ハ[口語の語彙 B]チャ  
[原典の詩句 A]ハ[口語訳の文 B]チャ

後水尾天皇講「百人一首聞書」では、引用「ト」を伴う「～ト+ナリ/云々/思心也」と、聞書の「～チャ」とが対応する例も見られる。

「～チャ」のような繋辞を用いた引用表現は、引用句と繋辞の間にポーズを置くことによって成り立つため、極めて話しことば（音声言語）的なものであったと考えられる。近世上方語・江戸語では、歌舞伎や浄瑠璃、小説の登場人物の会話に使用が認められる。さらに、それらの文献では、引用表現であることによって生じる 宣言・主張 念押し 揶揄・皮肉 といった意味合いを用いた、終助詞的用法も生じていることが観察できる。

(2)江戸期「国字解」における引用表現「～デアル」

(1)の成果を踏まえて、近世の「国字解」で多用される「～デアル」について、文末表現「～チャ」と同じような引用表現が含まれていないかを検証した。

「国字解」の「デアル」は、近代の言文一致以降広く用いられる繋辞「デアル」の語史や、その「デアル」を基調とする文体「デアル体」の先駆として知られるが、用法や統語的特徴についての考察は少ない。

考察の結果、「デアル」の多用で知られる『唐詩選国字解』では、内容が似通うことが指摘されている他の本に比べて、「デアル」が原典の漢詩を口語訳した「文」に直接付く、引用表現が多用されていることが分かった。『国字解』との関係が議論されてきた『唐詩選解』と比べると、(4)のように、前者の「デアル」が後者では見られないことが多い。

(4)a.【軒に憑って涕泗流る】軒によって故郷を恋しう思うて、しきりに泪が下るである。

(『唐詩選国字解』・五言律詩「岳陽樓に登る」杜甫)

b. 軒ニヨツテ故郷コイシウ思ハレテ頻リニナミダガ流ル、

(『唐詩選解』中 17 才)

『唐詩選解』で「デアル」が見られないのは、「デアル」の前接部分が原典の当代語による直訳である場合に限られる。

引用表現の「デアル」が、『唐詩選国字解』で増補されたのか『唐詩選解』で省略されたのか、すなわち、どちらの本が先行したのかは、今後詳しく調査する必要がある。引用符の代わりに音声の休止が担う表現は口語的なもので、抄物の例から、注釈書の文体として採られるのは、特に講義の筆録や再現を志向する場合であることが判明している。「デアル」の引用表現等を手がかりに、『唐詩選国字解』の成立経緯が見直せる可能性がある。

(3)五山・博士家系抄物における濁音形 候

「杜詩抄」では、(1)の文末表現「～チャ」と同一の先行抄の中に、名詞や活用語連体形に直接付いて、専ら文末で用いられる「ソウ」が約 150 例ある。

(5)a.【畿一【処起漁樵】夔州ノテイソウ  
(一六乾 61ウ)

b. 天子ト云モノハヲコツテハカノウマ  
シイソウ (一六坤 39ウ)

これらの「ソウ」は前接要素から繋辞と考えられ、中世に丁寧語「候」で生じた「に+候」の訛形、濁音形の「ザウラフ」「ザウ」等の一語形「ゾウ」と判断できる。「ゾウ」は、注釈内容によって「チャ」「ナリ」等の文末表現を使い分ける「杜詩抄」の後半(巻 11～20)にのみ見られ、専ら簡易な語注や口語訳を示す。

一般的に、五山・博士家系の抄物において「候」に由来する諸形式が用いられるのは(「サウラウ」「サウ」「ソウ」「ス」など様々な表記・語形があるため、候 と表示する)。

登場人物同士の会話、講者が聴講者に対して用いたものに大別できるが、「杜詩抄」の「ゾウ」はである。の候が用いられるのは、清原宣賢講・林宗二聞書の一群の抄物に限られる。「毛詩抄」「古活字版日本書紀抄」等では、漢字表記「候」が多数認められ、「ゾウ」と同様、簡易な語注や講者の私見を述べる際に使われている。

五山・博士家系抄物において、講者から聴講者に対して用いられている候候は、実際の講義において、その場の聴講者だけに向けた補足的・初歩的な内容を語る際に、丁寧語を用いた口調に変えるという、所謂、スタイルシフトを反映している可能性が高い。従来、指摘されてきたように文語的なものであるとすると、表わす注釈内容にそぐわない。また、五山・博士家系抄物では、

のほか、例外的に、講者の経験談の中の会話で「サウ」等を用いた例があり、中に、語句の説明の仕方を例示した例(史記桃源抄)も見られるからである。

(4)まとめと今後の課題

抄物と講義の関わりの再検討

本研究によって、日本語史の資料として価値の高い抄物が未公開・未整備のまま残っていることを、具体例をもって示すことができた。上記の「杜詩抄」に関する、(1)・(3)の成果は、五山・博士家系抄物についての従来の研究では、これまで殆ど報告されてこなかった言語事象である。

また、「杜詩抄」の文末表現の考察を通して、抄物と講義との関わり、すなわち、口頭の講義から、注釈書として読むに堪える抄物の文体が生成される過程については、再検討を要することが分かった。例えば、「杜詩抄」で文末表現「チャ」「ゾウ 候」が用いられるのは、これらが注解の内容・難易によって使い分けられていることから、講義中のスタイルシフトまで含めた講者の口調を反映しようとしたためと考えられる。

(2)で扱った江戸期の「国字解」も講義に基づく注釈書であり、これらの講義に基づく口

語体注釈書が、どのような目的でいかなる過程を経て作成されたのかは、日本語史資料としての性格をより精確に把握するためにも、明らかにする必要があるだろう。以下、具体的な研究課題を挙げる。

#### 「杜詩抄」の公刊に向けた継続調査

「杜詩抄」については、本研究での言語事象の考察によって、室町末期～近世という抄物成立史上では最晩期成立の「木杯余瀝」「百人一首聞書」と同様に、講者の口調を細部まで記録・再現する志向を持った先行抄を含むことが分かった。

今後は、構成面から、1.文体の違いに基づき、編纂に用いられた先行抄物の数と種類を凡そ推定する、2.細字の書入れの翻刻と分類を行う、等の作業を継続して、早い時期の公刊を目指す。

“編纂抄物群”の抄物成立史上の位置づけ

抄物文体と講義との関わりに関しては、「杜詩抄」もその一つである、複数の先行抄を集成する「編纂物」「集成抄物」と呼ばれる抄物の特性、作成目的や言語的性格の解明を手がかりとしたい。

「編纂物」は、当初から著作として書かれる抄物が増える1530年代以降に同じく増加する。林宗二についても、抄物作成史上の業績として従来注目されてきたのは、博士家・清原宣賢による講義を筆録した「毛詩抄」「日本書紀抄」等であるが、晩年には、「東坡抄」「黄氏口義」「源氏物語」注の「林逸抄」等、文学作品についての抄物を編纂しており、まずは、これらに言語的な共通性や共通する作成目的がないか検討していく。

#### 「国字解」の資料的価値の再検討

抄物と国字解とは、共に講義に基づく注釈書でありながら、作成された思想的・学門的背景が異なるために、これまであまり較べられることはなかった。

国字解は、近世特有の類版・重版関係の複雑さから、言語資料としての性格に疑問を持たれたため、資料としての利用は盛んではない。従来のように、講者の講義に近い本の特定を目指すのではなく、大同小異のテキストが多数伝存することを生かし、言語的な差異から、講義との関係やそれぞれの作成目的、様々な言語事象を考察できる可能性がある。

#### <引用文献>

- 黒川洋一 1977 『杜甫の研究』創文社  
高見三郎 1977a 「杜詩の抄 杜詩続翠抄と杜詩抄」『山辺道』21  
1977b 「杜詩の抄のことば 表記・音韻を中心に」『国語国文』46-4  
芳賀幸一郎 1945 『東山文化の研究』河出書房  
1956 『中世禅林の学問および文学に関する研究』日本學術振興会  
柳田征司 2012 『日本語の歴史 3 中世口語資料を読む』武蔵野書院

2013 『日本語の歴史 4 抄物、広大な沃野』武蔵野書院

山本佐和子 2013a 「抄物」と中世室町期の文化 両足院蔵「杜詩抄」の成立を手がかりに 「異文化共生学」の構築 京都府立大学重点戦略研究費研究成果報告書

2013b 「文末表現「～チャ」を用いる抄物の資料性」第109回訓点語学会研究発表会、2013.10.20 於東京大学

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

山本佐和子、『唐詩選国字解』の「デアル」の一用法 『唐詩選解』との比較から、筑紫日本語研究会編『筑紫日本語研究 2015』、査読無、近刊、掲載頁未定

山本佐和子、五山・博士家系抄物における濁音形「候」について、国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十五』和泉書院、査読有、2016、pp.105-125.

[学会発表](計3件)

山本佐和子、「唐詩選国字解」における「～デアル」の一用法 「唐詩選解」との比較から、第263回筑紫日本語研究会、2015.12.28 於九州大学

山本佐和子、五山・博士家系抄物における語頭濁音の「候」 中世室町期の「候」由来の繫辞の諸形式、第109回国語語彙史研究会、2015.4.25 於大阪大学

山本佐和子、抄物に見られる文末表現「～チャ」の統語的特徴 近世以降の類似表現との対照から、土曜ことばの会、2014.10.25 於大阪大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 佐和子 (YAMAMOTO, Sawako)  
大阪教育大学・教育学部教養学科日本アジア言語文化講座・専任講師  
研究者番号：00738403